綾司・綾所考

―皇后宮職の手工業生産機構―

堀部 猛

Ayashi and *Ayadokoro*: Organization of *Kogogushiki* for Handicraft Production

HORIBE Takeshi

はしがき
❶奈良時代の皇后宮職と下部機構
❷皇后宮職の綾司
❸技術労働力としてのトネリ
❹皇后宮職下部機構の変容
むすび

【論文要旨】

奈良時代、皇后に附置された皇后宮職には様々な業務を担う下部機構があり、そのなかには製造・加工を担う組織も複数存在したことが、天平期の藤原光明子の皇后宮職から明らかにされている。そのうちの一つに、古代の高級絹織物である綾の名を冠した「綾司」があった。しかしながら、その具体的な活動を直接示す史料はなく、皇后宮職において綾の生産を担っていたかどうかも自明ではない。本稿は、天平十年頃に作成された「官人歴名」に見える綾司について、製織活動の有無とその目的、さらにその展開について考察を行った。

関連する史料を仔細にみると、綾司は、光明子の仏教信仰に基づく寺院への施入や、造営事業、写経事業などに必要な綾を製織していた可能性が大きい。その中核的な労働力は舎人であり、独立性の強いキサキ宮の伝統を継承する側面を有するものであった。

延暦二年（七八三）に立后された藤原乙牟漏の皇后宮職にも、「綾所」が存在したことを示す木簡が平城宮跡より出土している。時期を異にする皇后宮職に「綾司」「綾所」が共通して見出せる意義は大きく、これにより綾司（綾所）を奈良時代の皇后宮職固有の組織として位置づけることが可能になった。

こうしたあり方が大きく変革されるのは、平安遷都後最初に立后された嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の時である。皇后宮職の始動に際し、それまで編成されていた製造・加工を担う下部機構は縮小された。延暦～大同期に、物品の製造・加工を担う諸部門を中務省被管の内蔵寮・縫殿寮・内匠寮の三司に集約する官司再編がなされており、これが皇后宮職の下部機構縮小の受け皿になった。

【キーワード】 皇后宮職、手工業生産、綾、藤原光明子、舎人